一宮市博物館　1991.7

博物館だより

No.12

企画展　おもちゃ

平成３年７月２０日(土)～９月１日(日)

ぜんまい仕掛のネコとサル
日本玩具博物館蔵

清水のいちろんさん（串天神）
博物館明治村蔵

展示室から

現在、子どもたちを魅了しているコンピューター・ゲーム。しかし、その状況の中には、殻の中に閉じ込もりやすい現代の子どもの姿が隠されているような気がしてなりません。

以前は、ワイワイ騒ぎながら水鉄砲をうちあったり、駄菓子屋で少ないおこずかいを手に、ああでもないこうでもないと駄菓子や当てもんのおもちゃを吟味したものです。最近ではその駄菓子屋さんもずいぶん少なくなり、豪華なおもちゃが増えてきたのも時代の流れと言えましょう。

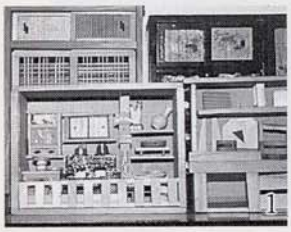
今回は、この展示を利用して大人の方々には思い出を、子供の皆さんには新しい発見を探していただければ幸いです。

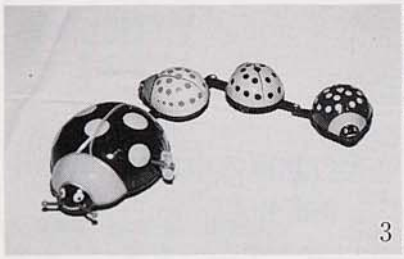
幼いころ、わたしたちの夢を育ててくれたおもちゃ。形や素材こそ変わってしまったものの、その心は今も生き続けています。現在も玩具問屋さんへ行くと、タイムスリップして子供のころに帰ったような思いがします。ブリキの金魚のじょうろ、くじ引き、リリアン、ままごとセット・・・。今回の展示では、「おもちゃ」と「郷土玩具」にテーマを分けて展示します。また、郷土玩具については、東海地方の資料を中心としました。

おもちゃ

おもちゃは、流行やその時代の生活を反映して作られてきました。例えば、ままごとセット。木や竹素材中心のものからブリキのもの、アルミ製のもの、プラスチック製のものへと変化してきました。さらに、セットの中身がおくどさんからガスコンロ、電子レンジへと変化することは、わたしたちの生活スタイルの変化に当てはめることができます。男の子のおもちゃの代表選手であるメンコも、江戸時代以来の土製のものから紙製・鉛製やアルミ製へと素材が変化し、その図柄にはそれぞれの時代に活躍した野球選手、俳優、マンガの主人公などが使われました。

また、忘れてはならないのがおまけや景品です。おまけ欲しさにキャラメルを買った思い出をもつ人は、たくさんいるのではないでしょうか。





1.木のままごとセット　2.ブリキのままごとセット
3.ぜんまい仕掛のてんとう虫　　4.数字合せ
いずれも日本玩具博物館蔵

期間中の博物館の行事

博物館映画劇場　８月１１日
ＰＭ１：３０、３：００からの２回
題名「ゴンタと呼ばれた犬」
「日本昔話－花咲か爺さん・一寸法師・さるかに合戦」（アニメ）

郷土玩具

ふるさとの思い出や旅の思い出として、郷土玩具をだれもが一度は手にしたことがあるのではないでしょうか。素材も木や土、紙など非常に素朴で、おもちゃのように時代の流れに大きく影響されることはありません。地域色が強いものの、伏見人形の「まんじゅう食い」のように東北から九州まで広がってしまったものもあります。

また、郷土玩具には疫病よけや豊饒を願うものなど庶民の祈りを託したものが少なくありません。一宮でも養蚕が盛んだったころは、岐阜市にある美江寺の蚕祭りで土鈴を買い、蚕がよく育つように祈ったということです。

今回の展示では、このような郷土玩具を約３０件展示します。

1.四日市の大入道
2.鳳来寺の虎童子
3.十二支・子丑寅卯
（名古屋　野田末吉氏製作）
いずれも博物館明治村蔵

※今回の展示では、おもちゃについては日本玩具博物館、郷土玩具については博物館明治村、駄菓子屋の復元については岐阜市歴史博物館のご協力を得ました。ここに、深謝の意を表する次第です。

（田中禎子）

資料紹介

一宮市指定文化財

骨壺（法円寺出土）

大和町馬引　法円寺蔵

市教委では、平成３年５月３０日から７月２０日までの予定で、一宮市大和町馬引の法円寺境内で、発掘調査を開始した。

法円寺遺跡（中世墓）は、法円寺境内北側にあり、昭和６年、瀬戸、常滑、美濃須衛の蔵骨器１０点が出土し、その存在を知られるようになった遺跡である（骨壺は昭和３６年３月２７日一宮市文化財に指定)。さらに、昭和５７年７月から８月にかけて発掘調査を実施し、河原石の間に散乱する蔵骨器や石製五輪塔を検出した。出土品は、蔵骨器１３０点余(瀬戸、常滑、美濃須衛窯製)、石製五輪塔などで、出土遺物などの検討から、１３世紀初頭（鎌倉時代初期）に形成され始め、１５世紀中葉（室町時代中期）まで、存続したと考えられている。

今回の発掘調査に先立ち、４月２７日から５月２６日まで開催された企画展「一宮の文化財II」に、市文化財指定骨壺１０点と指定外の１点が出陳され、管見に触れる機会があったので、以下紹介する次第である。

指定No.１　瀬戸三耳壺

(高22.5cm、胴径17.9cm)

頸部下と胴部に５、６条の浅い沈線を、また四耳にも同様の沈線を施す。口縁端部は面取り調整。底部穿孔。昭和５７年発掘調査で出土した口縁の一部が接合したものである。

指定No.２　美濃須衛四耳壺

(高26.6cm、胴径19.4cm)

口縁端部全周を欠失している。口縁端部が頸部に密着しない古い形態をとるもので、耳は中央部にヘラで１本の刻目をいれる。底部穿孔。

指定No.３　美濃須衛壺

(高19.5cm、胴径16.2cm)

口縁内面を受け口状に整形する。昭和５７年出土の口縁片が一部接合している。

指定No.４　瀬戸四耳壺

(残高22.7cm、胴径20.1cm)

口縁部を全く欠失している。また四耳の内３つを欠失する。灰釉は刷毛による塗布。

指定No.５　瀬戸四耳壺

(残高22.2cm、胴径18.0cm)

口縁上半を欠失する。肩部のひとつの耳の横にヘラによる幾何文様が施される。灰釉は刷毛による塗布。肩部の約３分の１にススが付着している。

指定No.６　瀬戸瓶子

(高21.8cm、胴径16.5cm)

いわゆる梅瓶形の瓶子で、肩部、胴部、胴部下に各２条ずつの沈線を施す。底部は３分の２ほどが接合されており、抜けていたのか出土時点で割れたのかは不明。

指定No.７　瀬戸四耳壺

(残高28.2cm、胴径23.1cm)

口縁上半欠失。肩部内面に指圧痕。

指定No.８　瀬戸瓶子

(高28.5cm、胴径16.5cm)

昭和５７年出土の口縁片が接合。

指定No.９　瀬戸四耳壺

(残高20.5cm、胴径16.5cm)

四耳の内３つ、及び高台欠失。口縁端部面取調整。

指定No.１０　常滑壺

(残高21.8cm、胴径19.2cm)

口縁上半部欠失。肩部に１条の沈線を施し、その上１ヶ所に押印がある。胴部以下は縦方向のへら削り調整。

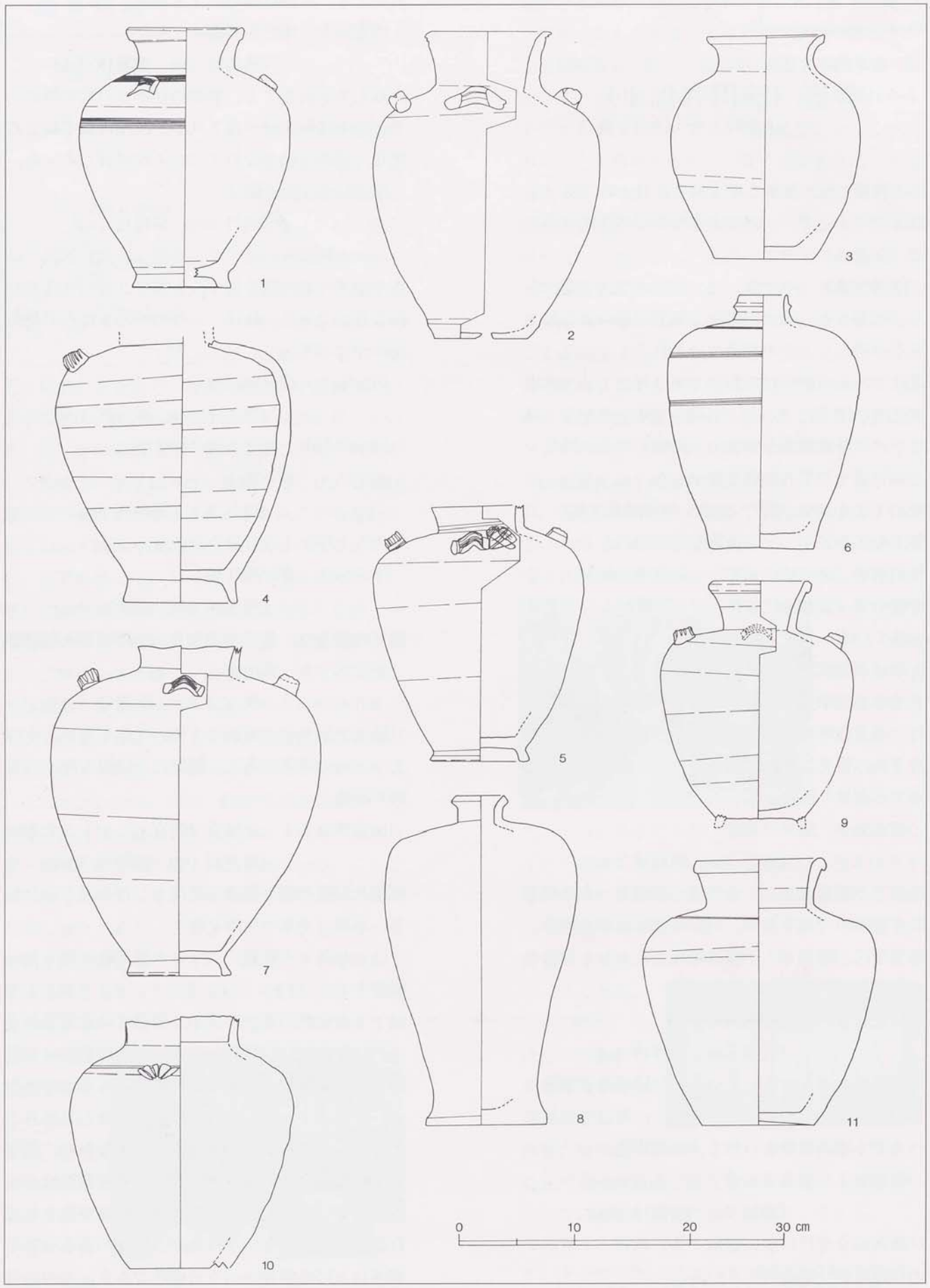
指定外No.１１　常滑壺（便宜上No.１１とする）

(高さ23.0cm、胴径19.8cm)

本堂北西部の樹木移設の際出土したものといわれる。肩部に１条の沈線を施す。

以上が各々の概観で、No.２の四耳壺が最も古い形態を示し、以下１、４、５、７、９、１０、１１は１３世紀代、６、８は１４世紀代に比定されよう(３については不明)。いずれも、時期的には昭和５７年発掘調査の範疇を逸脱するものはではない。ただ、１、３、８の口縁片が接合していることは、二つの可能性を示唆する。すなわち、昭和６年の骨壺出土地点が境内北側の発掘調査地点に近接していた可能性と、蔵骨器の底部穿孔または口縁部を打欠くという行為が、墓地のある一定の場所における儀礼という可能性である。この点については今後の検討課題としたい。

(土本　典生)

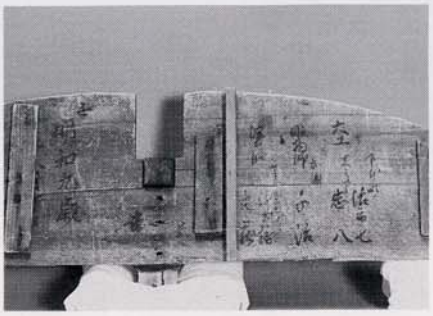

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
10
20
30 cm

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

民俗探訪（1）

石刀祭

市内今伊勢町馬寄では、毎年4月19日以後の最初の日曜日に石刀祭が行なわれている。この祭りは石刀神社に馬寄の瀬古が山車からくり・献馬を奉納するもので、現在大聖車、中屋敷車、山之小路車の3輛の山車がからくり奉納を行っている。関ヶ原の合戦の際に徳川氏がこの地に陣営をしき社殿等が壊され神社が荒廃したため、合戦後徳川氏の命により修復工事がなされ、その奉祝として山車・献馬を奉納したのが始まりとされている。石刀神社に伝わる宝暦年間に書かれた文書の写しによれば「例年八月十九日祭礼執行仕候　但し何の年相初り候共相知れ不申候　右祭礼に付慶長十三年戊申年奉願上、山車弐輛又候元和二丙辰年奉願上、山車壱輛馬塔五疋氏子より相勤申候」と記されている。宝暦7年の『尾陽村々祭礼集』からは猩々、湯立、道成寺のからくりが行われていたことがわかる。また、細野要斎が記した『感興慢筆』には、嘉永4年8月20日（雨のため19日から順延）の祭礼の様子が記されている。ここでは、飾り馬をすべて走らせた後、山車3輛の偶人を躍らせたとある。このからくり人形も牡丹の花が開き唐子が登場するもの、高ぶくりをはいた人形が階段を上がっていくものと今はなき呑光寺車、更屋敷車のからくりの様子が描かれている。これらの2輛は戦災で焼失して現在はない。現在残っている山車では、大聖車の妻壁板の裏面にのみ「大工 下本町 治郎七 木之□忠八 彫物師　加納 千治 塗師 名古屋□□□ 弥兵衛 文蔵　錺？ 壬　明和九年 □□□□月吉日」



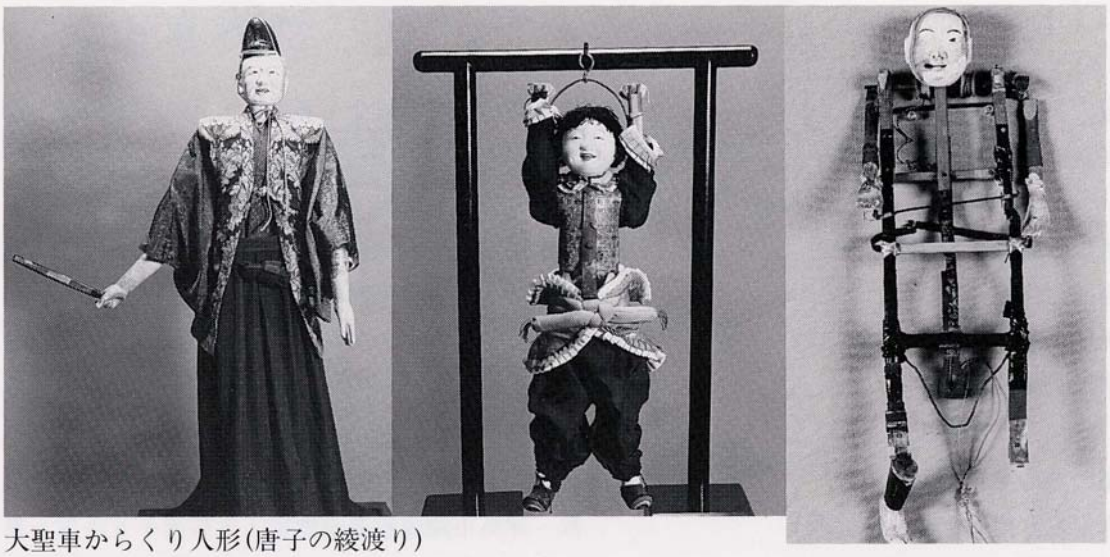
とあり、明和9年（1772）に大聖車の第3層の部分ができあがったことがわかる。

現在のからくりは、大聖車が「唐子の綾渡り」で中屋敷車が「唐子の大車輪」、山之小路車が「蓮台倒立などの倒立芸」である。いずれも離れからくりである。この中で、その由緒がわかっているのは山之小路車のもので、童子の箱書きに「文化七年　問屋町」、童子をのせておく台に「横町」の銘があることなどから西枇杷島で作られたものが現小牧市の聖王車へと譲られ、さらに山之小路車へと譲渡されたことがわかっている（右写真下段参照）。その際、お大将の人形のみが聖王車に残ったままになった。また、大聖車の唐子は20年ほど前に新しくしたもので（7代目玉屋庄兵衛作）、従来の人形は鯨の髭を使って作られており現在も保存されている（右写真上段参照）。

従来祭礼は8月19日に行われていたようであるが、現在は4月19日の例祭で祭礼日当日に行われていた頭人の行事を行い、からくり奉納は21日以後の日曜日に変更されている。頭人は大聖瀬古のみから選出され、明治時代までは頭元の家の元服前の子どもがなったものだった。その家に子どもがいないときは、親戚の家などから連れてきたということである。現在は青年層がその任を果たしている。従来のしきたり同様、大聖公民館では毎年「差口」がはり出され、頭人は1週間ほど前から不浄を避けて準備を整えるということである。

石刀祭は、伝統を守りながら新しく入ってきた人々をもその内部に取り込み、一体となって祭りを守ってきた。各地で共同体意識が薄れつつある現在、馬寄の祭りは昔の面影を残す代表的な祭りと言える。

※石刀祭の調査に際しては、石刀祭山車保存会会長佐藤常十郎氏、石刀神社木全貢氏、木全修氏をはじめ各山車の保存会の皆さんにはたいへんご迷惑をおかけし、またご教示いただいた。先の「一宮のまつり」展の際には、立松宏先生、鬼頭秀明先生に種々にわたりご教示を賜った。ここに深謝の意を表する次第である。（田中禎子）



大聖車からくり人形(唐子の綾渡り)
お大将　高さ123cm　　唐子（新）　高さ60cm　　唐子（旧）　復元高約36cm

中屋敷車からくり人形(唐子の大車輪)
大童子(姉)高さ110cm 童子　高さ70cm　　童子（新）　高さ83cm　童子（旧）　高さ80cm

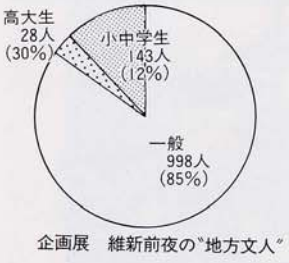
山之小路からくり人形(蓮台倒立他)
姉　高さ94cm　　妹　高さ73cm

石刀祭の様子

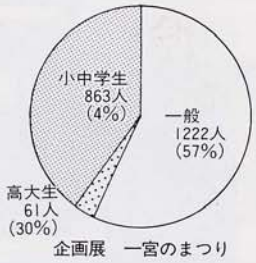
博物館日誌（抄）（3.1.1～5.31）

3.1.13　講演会「地方文人の役割」
　　講師　国立歴史民俗博物館教授
　　塚本　学氏
3.1.27　企画展「維新前夜の地方文人」閉幕
3.2. 3　博物館講座「古代を語る」
　　第１回「長屋王木簡を語る」
　　講師　東洋大学教授
　　鬼頭　清明氏
3.2.11　第２回「藤の木古墳を語る」
　　講師　奈良県立橿原考古学研究所
　　前園　実知雄氏
3.2.17　第３回「吉野ケ里遺跡を語る」
　　講師　天理大学教授
　　金関　恕氏
3.3.2～3.4.7　企画展「一宮のまつり」
3.3.10　講演会「尾張の山車」
　　講師　半田市立博物館長
　　立松　宏氏
3.3.17　講演会「尾張の民俗芸能」
　　講師　民俗芸能研究家
　　鬼頭　秀明氏
3.4. 7　映画会・展示説明会
　「祭りを伝える人々－尾張津島祭りとともに」
　「日本の太鼓」
3.4.15～3.4.21　「手つむぎ染め織り展」
3.4.27　企画展「一宮の文化財II」開幕
3.5.19　講演会「中世墳墓の諸相」
　　講師　一宮市文化財保護審議会委員
　　平田　伸夫氏

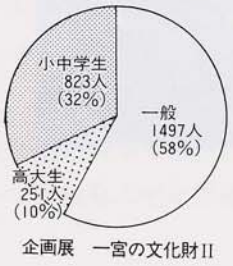
【展覧会開催中の入館者数】



企画展　維新前夜の"地方文人"



企画展　一宮のまつり



企画展　一宮の文化財II

企画展「維新前夜の地方文人」
　12/22～1/27　入館者数1169人／24日
企画展「一宮のまつり」
　3/2～4/7　入館者数2146人／31日
企画展「一宮の文化財II」
　4/27～5/26　入館者数2571人／26日

【ご来館有難うございました】
（3.1.1～5.31）
春日井市教育委員会・万昌会・八王子市職員・愛知県青年の家等連絡協議会研修会・中部中３年生・大和中３年生・藤枝市市議会議員・葉栗北小６年生・尾張地域建築行政研究会北支部・豊田教育事務所管内文化財保護委員研修会・恵那市教育委員会・奥町小・千秋東小・大和南小３年生・丹陽南小３年生・十四山村教育委員会・福島市教育委員会・中部電気保安協会・長野県伊那郡高森町・高浜市企画課職員・安城市歴史博物館・世界救世教・津島市錬成館茶道教室・大和南小６年生・東浅井婦人会・宮西小５年生・中島小４年生・ボーイスカウト一宮第１０団・大和西小６年生・丹陽小４年生・萩原小４年生・向山小６年生・淑徳学園・富士小６年生・倉敷市市議会議員・氏永子供会・全国童話人協会・中京大学考古学研究会・四日市市教育委員会・前橋市監査事務局

これからの博物館

☆市制施行７０周年記念特別展

風景を着る

会期3.10.26（土）～11.24（日）

中世末から江戸時代にかけて、現代の着物の原型となる小袖が上着として定着する。これらは辻が花染・友禅染や刺繍・摺箔などによって装飾された。中世までの大袖から小袖形式へと移行することで活動的なものとなり、また日本独自のものとして発展した。

本展では、「友禅染」に至って、その模様表現が微細に・華麗に表現されることとなる風景模様の展開に焦点を絞り、歴博コレクションの小袖衣裳や小袖屏風を中心に構成し、近世社会の発展の一端を示すものとする。

一宮市博物館だより　第12号
平成3年7月16日
編集・発行　一宮市博物館
〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL0586-46-3215
FAX0586-46-3216